

古米さんのこと

笹田友三郎

いまのような日程で入試がおこなわれるようになったのは、いつの頃からであったろうか。当時、経済学部長はたしか小松幸雄先生で、わたくしは教務主任であった。試験日が京都と地方で異なり、それにもなう入試判定資料の格差の処理を、経済学部の入試委員会で議論したことがある。

ボーダーラインを一本にするか、京都と地方の二本だてにするか。わたくしは両案それぞれの根拠を詳細に説明した。わたくしの提案が終わると、「直球で決めましょうや」という古米さんのひと言で、たちまち一件は落着となった。議論好きの小松先生も、もの言ういとまはなかった。

古米さんが喋ったのはずばりひと言であった。しかし、それは「簡単な方がいい」というだけのことはなかった。いろいろの角度から検討はしても、二段がまえの処理をするほどのことではなければ、わずかの格差にふり回されることはない。一本勝負でゆくべきだ。これが古米さんの言いたかったことである。わたくしは、慎重ではあるが、すつきりした処理を好む古米さんの真骨頂をかいま見たような気がした。

これを機に、わたくしは折にふれて「直球の古米さん」を口にするようになった。古米さんに「剛直球」というニックネームを呈したのは、わたしだと言われている。それを否定するつもりはないが、直球のうえにあとから「剛」の一字を加えたのは、校友会長の巽君であった。

古米さんは無用の口をきくことは一切なかったが、言うべきことははっきり言う人であった。考えかたがあまりに図式的ではないか、という古米評のあることも知っている。

しかしわたくしはあのととき、古米さんの「決断の潔さ」とでも言えるものを感じた。これが古米さんの魅力のひとつでもあったが、素っ気ないといわれたゆえんでもあったろう。

古米さんは経済学部長として、自治会にたいし断乎たる姿勢を貫き通した。あのとときの古米さんの私の強さに、一種の確信的なものを感じたのはわたくしひとりではあるまい。考えてみれば、古米さんは教育の場における現実と情緒的なものとを、ごちゃごちゃにすることを嫌っただけである。古米さんはルールの上を正しく歩むことに固執した人であった。仕事をきちんとしていることからえ



られる喜びは、古米さんにとって何ものにも代えがたいものであった。もっとも、私の強さで貫いた断乎たる姿勢とはいえ、下手な剣術使いのような手は決して打たない人であった。

自治会の承認をめぐる葛藤については、わたくしには忘れえない思い出がある。当時の部長会でのこと。「学生はわが子も同然、そのように考えたら……」というある人の発言に、「わたくしにはわかりません」とだけ古米さんはつき離れたように答え、あとはまるで貝のように口を開こうとはしなかった。

「望みある間に汝の子を打て」という箴言がある。鞭打つことをひかえるのは、教師としての責任の放棄ではないか。学生を憎むのではなく、学生を愛した古米さんの胸の底には、こうした思いが去来したのではなかったろうか。古米さんは敬すべきを敬し、愛すべきを愛し、憎むべきを憎む、徹底した人であった。あのとき口を閉じ、沈黙を通した古米さんの真意は解すべくもないが、わたくしには古米さんの気持を推察することはできた。古米さんにしてみれば、易しいことを拒絶して最もむづかしいことをやらねばならぬとい

うこと、個人の感情に優先する何かがあるということを、部長会の席で訴えたかったのではあるまいか。

人間は不完全なもので、どんな剛直な人にもひとつぐらいの弱点はある。矛盾した言いかたになるが、古米さんには脆さがあったから剛直でありえたといえなくもない。学部の大勢が自分の考えとちがうとき、古米さんは粘り強く柔軟に立ち向うよりも、学部長としての自らの進退にすぐ思いをいたすところがあった。あきらめがよすぎるのである。

自治会の承認をめぐる前記のトラブルがあったときのことだが、名古屋での父兄会の帰途、京都までの一時間足らずの車中で、古米さんはわたくしに同意を求める一方通行の話をつづけた。自分への支持が少なければ、学部長をやめるというのである。「若さには強引さがつきものだが、若さこそ価値だ」という古米さんの持論を楯にとり、わたくしは翻意を求めつづけた。ちょうど古米さんは、経済学部へ若い新風を導入するための人件に手をつけようとしていたからである。

古米さんに初めておめにかかったのは、古米さんがアメリカ留学から帰国されたときだ

から、もう三十数年も昔のことになった。端正な身だしなみと磨きのかかった挙措が、古米さんについての第一印象であった。あの独特のスタイルを、古米さんは年齢をとってからも捨てようとはしなかった。奔馬のように病勢がすすむまで、そうであった。これも、古米さんのわがままといえるかもしれない。

人間は身体のうちにも、相矛盾するような可能性をもっているのだろうか。古米さんは少しばかり猫背であったが、背の高い堂々たる体軀で、血色はよく、年齢よりはかなり若くみえた。しかし、病氣から解放されるときはほとんどなかった。教壇で絶句するような激痛さえ誰にも打明けられない人であったから、ほんとうのところはうかがうすべもない。古米さんを衝き動かしたのは、神の力だったのだろうか。弱音は決して吐かぬ人であった。

田辺校地をめぐる実施計画決定後の、卒業式や入学式はたいへんな荒れようであった。身も心もすりへらすような思いで自分とたたかっていた入学式当日の夜の、古米さんのいたわりの電話の声はいまもわたくしの耳の底に残っている。情の厚い人であった。

(大学経済学部教授)

同志社談叢

第七号

論文

新島襄の「私学」思想……………沖田行司

福士成豊と新島襄……………関 秀志

— 福士の新島宛書簡を中心として —

スカッター家の人びと……………本井康博

— L・L・ジーンズと熊本バンドをめぐる —

水沢における山崎為徳資料……………高橋光夫

— 水沢教会収蔵資料を中心に —

雲峰論補遺……………河野仁昭

同志社の近代建築(補遺)……………前 久夫

— 遺構と資料 —

資料

聖霊降臨記実 後編

同志社理事會議事録

大正八年十一月〜同十一年八月

(頒価一、〇〇〇円)

発行・同志社社史資料室
取扱い・同志社収益事業課

電話(〇七五)二五一—三〇三七・八

「石ころの生涯」

——故清水安三先生を偲んで——

遠藤 彰

清水安三先生は、昨一九八八年一月一七日、
九六年の波瀾に富んだ生涯を閉じられた。

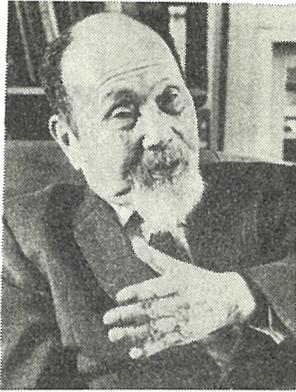
『石ころの生涯』とは、故清水先生の自叙
伝（一九七七年刊）の表題である。この書物
は、一九三九年朝日新聞社から出版されて多
くの版を重ねた『朝陽門外』で代表される中
国の社会・政治・教育・宗教についての論著
と、『中江藤樹の研究』（一九四八年）をはじめ
めとする藤樹とキリスト教の関わりを論じた
数書とともに、先生の面目まことに躍如たる
著作である。

『石ころの生涯』には、「起きろ石ころ」と
いう滋賀県高島郡新儀村での誕生から、膳所
中学をへて同志社大学神学部に進び、卒業後
日本組合教会の宣教師として奉天（現瀋陽）
に派遣されるまでの物語と、「崇貞・桜美林
物語」という、一九二一年北京に創立した崇
貞学園、および一九四五年敗戦とともに無一
物で引揚げ徒手空拳をもって町田市に創設し
た桜美林学園の物語とが収録されている。な
お、この書は先生が亡くなられたあと、令息
畏三氏によって先生の他の著書や論文、説
教、講演などからの抜粋を加えられ、同じ書
名で改めて刊行された。

先生は、旧制膳所中学生時代、大津教会に
通い、一七歳で洗礼を受けられた。洗礼者は
当時の四条教会（現京都教会）牧師であった
牧野虎次先生（のちの同志社総長）で、その
時「神は同志社のキャンパスにころがってい
る石ころさえも、なおよく新島襄とはなしう
るのである」と語られた。清水先生はこの言
葉に感動し、「まことに石ころの如き己れを
も神用いたもうならば」と、同志社神学部で
学ぶ決心を固められたのであった。

一九一〇年代の同志社の寮の照明は石油ラ
ンプで学生たちは我慢して勉強していたが、
先生は夕食後一寝いりして一時ごろ起出し
今出川通りの市電停留所の電灯の下で読書し
たという。三年生の頃、近江八幡に近江兄弟
社を興して伝道を開始していたウィリアム・
M・ヴォーリズ氏のヘルパーとなり、毎金曜
日徒歩で天津に出て舟で対岸に渡り、野田で
集会の指導をし、翌朝徒歩で安土に行って集
会をし、日曜朝と夕べの礼拝を司どり、月曜
の授業に間にあうように京都に帰るといいう生
活を続けられた。

同志社卒業後、前述のように奉天（瀋陽）に
赴き、ついで北京に移り朝陽門外に崇貞学園



を設立された。当時この地域は同市の最貧地域であったが、先生が学園設立にこの場所を選ばれたのは、あの洗礼の際の決意を中国民衆の教育と福祉のためにこそ実践したいという召命意識の表れであったと思われる。

その間暫く米国オベリン大学神学部に留学の機会を与えられたのち、先生は一九二七年から数年間同志社大学予科で講師を勤め、その間野球部長をもされた。一九三二年崇貞学園に帰られたが、この間夫人を失われ孤軍奮闘の有様であった。やがて、著名な女子教育家小泉郁子女史と再婚、夫妻あい携えて学園の教育の充実と経営の安定のために力をつくすことができるようになった。

しかし、一九三一年「満州事変」が勃発、一九三七年の「芦溝橋事件」と「上海事変」によって日本軍の中国侵略が、一挙に拡大する勢いの中で、先生ご夫妻の活動は著しい制約を蒙ることとなったが、ご夫妻は些かもひるまず学園と生徒たちを護られた。のみならず先生は、キリスト教的平和主義の立場から当時の日本の国策や軍部の戦争拡大方策を批判する論著を次々に発表して日中の識者の支持を得られたが、多くの圧迫や弾圧にもさらさ

れることとなった。その中で胡適と親交を結び蔣介石と会見し、北京攻囲の日本軍指揮官と守備軍の宋哲元將軍の両者を説いて北京を戦火から守ることに成功したり、この間の先生の平和への努力はまことにめざましいものがあった。

敗戦によってすべてを失われた先生ご夫妻は、賀川豊彦先生の助けで現在の土地を得、桜美林学園を創設された。この学園もまた大いに発展を続けて、現在大学、短大、高校、中学に六千名の学生生徒を擁する大学園となっている。キャンパスのまん中に「夢、大学の設立こそは少き日に新島襄に享けし夢かも」と刻んだ碑が立てられている。洗礼の日以来の「石ころの生涯」の、また第二の新島たらんことを目ざして歩んだ先生の、志の達成を感謝する心が美しく語り出されている。

同志社は一九七五年、先生に名誉神学博士号を贈呈してその御功績を賛え、また深い母校愛にお応えした。在天の霊に神の平安永えに豊かならんことを。

令孫清水志雄牧師（日本基督教団今津教会）から種々得難い資料の提供を頂いた。記して感謝申しあげたい。

（大学神学部教授）